

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02680

研究課題名（和文）微視的類型論によるパラレル・コーパスを利用したバルト海周辺諸語の不定人称文の研究

研究課題名（英文）Microcomparative Typological Study of Impersonal Sentences of Baltic Region Languages Using a Parallel Corpora

研究代表者

佐久間 淳一（Sakuma, Jun'ichi）

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：60260585

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、フィンランド語、エストニア語、アイスランド語、フェーロー語、スウェーデン語、デンマーク語、リトアニア語、ロシア語等、バルト海周辺諸語における不定人称文について、パラレル・コーパスによる調査や母語話者からの聞き取り調査を活用し、機能主義的観点から、かつ微視的類型論、地域言語学に立脚して、man-constructionに対応する各言語の表現を対照したほか、各種不定人称文の分布や機能、言語間の異同等に関する考察を行った。また、本研究課題の一環として、上記言語を対象に『星の王子さま』及び『ハリー・ポッターと賢者の石』のパラレル・コーパスを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『星の王子さま』のパラレル・コーパスを用いて、原文のフランス語のman-construction との対応を手掛かりに、各言語の不定人称文の特質や機能について考察した結果、様々な不定人称文の間で一定の機能分担が行われている一方、その分布や機能には重なりもあることが明らかになった。また、不定人称文に関して似ているとされるリトアニア語とフィンランド語が、man-constructionとの対応ではかなり異なる様相を示すこと、逆に、異なるとされているリトアニア語とロシア語の翻訳が似ていることも判明した。このことは、本研究が微視的類型論の観点を採用したことによってはじめて得られた成果と言える。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we examined impersonal sentences in Finnish, Estonian, Icelandic, Faroese, Swedish, Danish, Lithuanian, Russian, and other Baltic region languages from the perspectives of functional linguistics, microcomparative typology, and regional linguistics, by using parallel corpora and interviews with native speakers. We contrasted the expressions in each language corresponding to the 'man-construction'. We also discussed the distribution and functions of various impersonal sentences, as well as the differences between those Baltic region languages. As part of this research project, parallel corpora of "The Little Prince" and "Harry Potter and the Philosopher's Stone" were created for the above languages.

研究分野：言語学

キーワード：不定人称文
ロシア語
パラレル・コーパス
フィンランド語
アイスランド語
スウェーデン語
リトアニア語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパの諸言語に見られる不定人称文（非人称文）の類型論的研究には、例えば Siewierska (2011) があり、そこでは、不定人称文の現れ方によるヨーロッパの諸言語の分類が試みられている。Siewierska によれば、言語は、①ドイツ語の *man* に相当する不定代名詞を主語に取る ‘*man-construction*’ が存在するかどうか、存在する場合、それがどのような意味を表すか、②一般的な人を指して 3 人称複数代名詞が使われることがあるかどうか、使われる場合、それを含む文はどのような意味を表すか、③一般的な人を指すために主語人称代名詞が脱落することがあるかどうか、という観点から分類することができる。もっとも、各観点が単純な二項対立ではないため、その組み合わせにより不定人称文の現れ方は多種多様ということになる。下記の表 1 は、本研究が対象とするバルト海周辺諸言語（及びドイツ語、英語）に関して、観点ごとの特徴をまとめたもので、Siewierska は、特に②の観点に基づいて、ヨーロッパの言語を 4 つのグループに分類している。

表 1 Siewierska (2011)によるバルト海周辺諸語の不定人称文のタイプ

	man-constructions	third-person plural impersonals	pro-drop
アイスランド語	generic use	less than generic, corporate and vague uses	non-pro-drop
スウェーデン語	generic and episodic use	less than generic, corporate and vague uses	non-pro-drop
フィンランド語	x	no 3PL-IMPS or only lexically restricted uses	partially pro-drop
エストニア語	x	no 3PL-IMPS or only lexically restricted uses	full-pro-drop
ラトヴィア語	x	less than generic, corporate and vague uses	full-pro-drop
リトアニア語	x	no 3PL-IMPS or only lexically restricted uses	full-pro-drop
ロシア語	x	generic, corporate, vague and specific uses	partially pro-drop
ドイツ語	generic and episodic use	less than generic, corporate and vague uses	non-pro-drop
英語	x	generic, corporate and vague uses	non-pro-drop

その分類によれば、フィンランド語、エストニア語、リトアニア語は同じグループに属することになるが、確かにこれらの言語は、フィンランド語が一部異なるものの、②の観点だけでなく 3 つの観点すべてでほぼ同じ特徴を示しているため、分類には妥当性があるように見える。しかし、アイスランド語、スウェーデン語、ラトヴィア語は②の観点のみに基づけば同じグループということになるが、①と③の観点に関しては異なる特徴を持っている。また、フィンランド語、エストニア語、リトアニア語も、3 つの観点に関してはほぼ共通とはいえ、詳細に見れば様々な違いがある。よって、Siewierska の分類は一定の妥当性を持つものの、言語間の異同についてはさらに詳細な検証が不可欠であり、場合によっては分類の枠組み自体を再検討しなければならない。

2. 研究の目的

不定人称文は、言語類型論における主要な研究テーマの一つであり、Malchukov & Siewierska (2011)をはじめ、既に多くの研究があるが、実際、主語と述語の結びつきを核とする言語の成り立ちを理解するに当たり、主語を取って表示しない不定人称文を言語の機構の中でいかに位置づけるかということは、避けて通れない課題と言える。他方、不定人称文の使用には文脈も関わっており、このことは、言葉によってテキストが語られる際の視点やパースペクティブの選択に不定人称文が関わっていることをも意味しているが、その機能については、未だ十分に解明されているとは言い難い。そのため、本研究は、バルト海周辺の諸言語を対象に不定人称文の現れ方の相違を記述し、不定人称文の機能を検討することを通して不定人称文が言語の機構の中で有する機能を解明し、ひいては、言葉による「語り」がどのように組織されているのかを明らかにすることを目標とする。

なお、本研究では、Holvoet (2001)に従い、動詞と一致する主語が現れないという意味で統語的に特殊な文を、広く不定人称文ないし非人称文と呼ぶこととする。また、不定人称文と非人称文の術語上の区別については、各言語の研究においてそれぞれ慣習的に使い分けられているため、基本的にはその慣用に従うこととする。したがって、本研究は「不定人称文」を研究対象とするが、「非人称文」と呼ばれることがある文もその対象に含むものとする。

3. 研究の方法

本研究では、バルト海周辺諸言語の不定人称文について詳細な対照研究を行うにあたり、そのための枠組みとして、microcomparative perspective (微視的観点)を導入した微視的類型論 (cf. Fernandez & Etxepare (2013))を採用する。微視的類型論は、従来の言語類型論の手法とは異なり、系統的に近い言語同士あるいは同じ言語の方言同士を対照することによって統語的な多様性を見出すという手法であり、基本的には同じ性質を持っているはずの言語同士を比較しているため、何らかの統語的な違いが言語間で見つかった場合、なぜそういう違いが生じるのか、確度の高い考察ができる利点がある。系統的に近い言語からなる言語グループが互いに密接な関係を持ちながら複数存在しているバルト海周辺は、微視的類型論の観点が適用しやすい地域でもあり、これらの言語を対象に微視的類型論の観点から研究を進めることで、統語理論の発展にも貢献することができる。

また、本研究では、対象とする言語のパラレル・コーパスを構築し、それを当該諸言語の対照研究に利用する。今や、言語研究に言語コーパスを利用することは常識だが、各言語のコーパス

は、その成立の事情も性格もそれぞれ異なり、対照研究や類型論研究で直接的な根拠として用いるには制約も多い。その点、複数の言語について並行的な言語資料が得られるパラレル・コーパスは、特に、文脈的な要因を考慮する必要がある場合に威力を発揮するものと期待される。また、系統的に必ずしも同一ではなくとも地理的に密接な関係を持っているバルト海周辺の諸言語についてパラレル・コーパスを構築することは、当該諸言語の研究基盤を強化する上でも意義のあることだと考えられる。

4. 研究成果

本研究では、各言語の不定人称文に特異的に観察される語順や、非人称動詞と共起する名詞句の格の種類とその分布や機能等に着眼した分析を行ったほか、『星の王子さま』のパラレル・コーパスを用いて、フランス語原文の *on* を主語とする *man*-construction が各言語でどのように翻訳されているか対照研究を行った。

フィンランド語訳に関しては、*man*-construction の多くが、非人称文ないし不定人称受動文で対応していることがわかった。非人称文、不定人称受動文はフィンランド語において代表的な不定人称文であり、予想された結果とも言えるが、他の方法で訳されている例も全体の4割ほどあり、必ずしも単純に非人称文、不定人称受動文が対応しているわけではない。また、原文の他動詞が自動詞化されている例が全体の15%を占めるが、その例の多くが主格主語を持っていないことが注目される。このことは、フランス語の原文において、動詞が他動詞ながら明確な目的語を持っていないことを意味し、そのような文を訳す際には、非人称文や不定人称受動文は好まれないことがわかる。

フィンランド語における表現	件数
非人称文（下記の非人称文を除く）	19
非人称文 (<i>voida</i> 'can')	13
自動詞化	10
不定人称受動文	9
<i>ihminen</i> 'man' が主語	3
非人称文 (<i>täytyä</i> 'must' / <i>olla</i> 'be' + 受動現在分詞)	3
3人称単数主語 (<i>hän</i> 'he/she')	2
1人称複数主語（動詞に標示）	2
1人称単数主語（動詞に標示）	1
<i>itse</i> 'self' が主語	1
その他意識等	9
計	72

アイスランド語訳では、不定代名詞的用法の *maður* 「人」の単数形が最も多く、次いでその複数形 *menn* 「人（複数）」を用いた構文が多かった。一方、フェーロー語訳では人称代名詞 *tú* 「あなた」による構文が最も多く、それに次いで不定代名詞 *ein* 「一人」による構文が多く、不変化詞 *man* 「人」を用いた構文も見られた。Siewierska (2011) では、アイスランド語について、「人」を主語とする非人称構文は総称的用法のみをもち、3人称複数による非人称構文は曖昧なまたは総称的な動作主を表す用法をもつ言語とされているが、本研究の結果により、先行研究のアイスランド語に関する情報を細かい点において補完・修正できると言える。一方、フェーロー語では、「人」の複数形である *menn* は、今回使用したコーパスでは用例が1件のみで、現段階では用法の広がりや確定できていない。

アイスランド語	例の数	フェーロー語	例の数
<i>maður</i> 「人」（単数形）	25	<i>man</i> 「人」（不変化詞）	7
<i>menn</i> 「人」（複数形）	13	<i>menn</i> 「人」（複数形）	1
<i>ég</i> 「私」（代名詞）	1	<i>eg</i> 「私」（代名詞）	1
<i>við</i> 「私たち」（代名詞）	3	<i>tú</i> 「あなた」（代名詞）	22
<i>allir</i> 「みんな」	1	<i>vit</i> 「私たち」（代名詞）	1
<i>enginn</i> 「誰も～ない」（不定代名詞）	2	<i>ein</i> 「一人」（不定代名詞）	12
非人称構文	15	<i>eingin</i> 「誰も～ない」（不定代名詞）	3
その他	12	<i>fólk</i> 「人々」	1
合計	72	非人称構文	11
		その他	13
		合計	72

リトアニア語、ロシア語については以下のことが明らかになった。すなわち、Siewierska (2011) の分類では、リトアニア語は事実上3人称複数の不定人称を欠くグループ(IV)に属しているのに

対して、ロシア語は 3 人称複数不定人称のすべての用法をもつグループ(I)に属しており、2 つの言語は明確に異なるタイプの言語と規定されている。しかし、フランス語原文の *on* による不定人称文に対応する翻訳を調査してみると、ロシア語に関しても、3 人称複数の不定人称文よりも 2 人称単数の一般人称文の方が多く用いられていた。また、リトアニア語訳とロシア語訳では、いずれも、フランス語で幅広く用いられる *on* による不定人称文に対し、形容詞中性形、動詞不定形、非人称動詞など多様な非人称文を対応させている点で共通性があった。このような結果は、リトアニア語訳とロシア語訳をパラレル・コーパスによって調査する方法が、不定人称文の意味と機能をより正確に理解する上で有効であることを示していると言える。

リトアニア語	例の数	ロシア語	例の数
žmogus 「人」(単数形)	1	я「私」(1 人称代名詞)	1
žmonės 「人々」(複数形)	3	人称構文(一般人称文; 2 人称単数)	16
kas nors 「誰か」(不定代名詞)	2	人称構文(不定人称文; 3 人称複数)	9
人称構文(1 人称複数形)	1	非人称動詞からなる非人称文	4
人称構文(一般人称文; 2 人称単数)	26	不定形からなる非人称文	3
人称構文(不定人称文; 3 人称)	0	非人称受動文(未完了受動)	1
非人称動詞からなる非人称文	2	3 人称命令「～させる」	2
不定形からなる非人称文	3	形容詞中性形からなる非人称文	16
非人称受動文(未完了受動)	4	その他	20
人称受動文(未完了受動)	6	合計	72
形容詞中性形からなる非人称文	8		
その他	16		
合計	72		

スウェーデン語訳に関しては、そもそも異なる二つの翻訳があり、*man*-construction に対応する表現において、二つの翻訳の間で著しい差があることが明らかとなった。一方の翻訳では、概ね *man*-construction がそのまま *man*-construction で訳されているのに対し、もう一方の翻訳では *man*-construction が全く使われていない。一方、デンマーク語について調べたところ、スウェーデン語の翻訳の一方と同じく、概ね *man*-construction がそのまま *man*-construction で訳されていた。このことは、スウェーデン語とデンマーク語がともにドイツ語と近い関係にあることを考えれば首肯できる結果と言える。ただし、スウェーデン語のもう一方の翻訳では全く異なる訳になっていることから、*man*-construction の翻訳にそれ以外の表現が使えないというわけではない。また、概ね *man*-construction が対応している翻訳でも、詳細に検討すると、いくつかの動詞は一貫して *man*-construction 以外で訳されていることがわかった。例えば、原文が「書く」を意味する動詞の場合、*man*-construction は用いられず、*det står...* (lit. *it stands...* 「～と書かれている」) という非人称構文が用いられる。大規模コーパスでも *man*-construction で動詞 *skriver* (書く) が用いられる例はほとんどなく、*man*-construction と非人称構文は(一部)競合する構文であることが明らかになった。実際、二種類あるスウェーデン語訳のうち、*man*-construction が一切用いられない翻訳では非人称構文が多用されており、このことから、*man*-construction と非人称構文の競合を主張できると思われる。

不定人称文の定義を広くとった場合、各言語とも、その定義に当てはまる不定人称文は多様であり、実際、『星の王子さま』の翻訳においても、スウェーデン語やデンマーク語のように、ほぼ *man*-construction を用いて訳されている言語もあれば、多様な表現で訳し分けられている言語もある。本研究では、原文のフランス語の *man*-construction との対応を手掛かりとして、各言語における様々な不定人称文の特質や機能について考察を行った結果、様々な不定人称文の間で一定の機能分担が行われている一方、その分布や機能には重なりもあることが明らかになった。また、それらの使い分けに係る要因のいくつかについても明らかにすることができた。Siewierska(2011)の分類では同じグループに属すとされているリトアニア語とフィンランド語が、*man*-construction との対応ではかなり異なる様相を示すこと、逆に、異なるグループに属すとされているリトアニア語とロシア語における翻訳が似ていることも判明した。これらのことは、本研究が微視的類型論の観点を採用したことによってはじめて得られた成果と言える。

原文の *man*-construction の翻訳においては、多くの言語で様々な不定人称文が使分けられているが、不定人称文以外の表現で訳されている場合もあり、訳文としてどのような表現が選択されるかは、翻訳者の技量や好みも影響していると考えられる。その一方、その選択に文脈が関わっていることも事実であり、文脈その他の要因とそれぞれの不定人称文が担う機能が相俟っ

て、具体的な表現が選択されている。本研究では、その関わり合いについても考察を進めたが、文脈の展開、あるいは「語り」の組織化において不定人称文が果たす役割については、具体的な例を増やして検討を進める必要がある。今後、他のパラレル・コーパスも利用し、さらに考察を深めていきたい。

分析テキスト

- Saint-Exupéry, Antoine de. 1971. *Le petit prince*. Boston: Mariner Books.
Saint-Exupéry, Antoine de. 1997. *Pikku Prinssi*. (Irma Packalén, trans.). WSOY. (フィンランド語訳)
Saint-Exupéry, Antoine de. 2017. *Litli prinsinn* (Þórarinn Björnsson, trans.). Reykjavík: Mál og menning (originally published by Bókaútgáfa Menningarsjóðs 1961). (アイスランド語訳)
Saint-Exupéry, Antoine de. 2015. *Tann litli prinsurinn* (Alexandur Kristiansen, trans.). Fuglafjörður: Egið forlag (2nd edition, 2nd printing). (フェーロー語訳)
Sent-Egziuperi, A. de. 1995. *Mažasis princas* (Vytautas Kauneckas, trans.). Vilnius: Džiugas. (リトアニア語訳)
Sent-Ekzjuperi, A. de. 1999. *Malen'kij princ* (Nora Gal', trans.). Moskva: Rosmen. (ロシア語訳)
サンテグジュペリ、アントワース・ド (小島俊明訳) 2006. 『対訳 フランス語で読もう「星の王子さま」』。東京：第三書房。

参考文献

- Fernandez, Beatriz & Ricardo Etxepare. 2013. *Variation in Datives: A Microcomparative Perspective*. Oxford University Press.
Holvoet, A. 2001. Impersonals and passives in Baltic and Finnic. In Dahl, Östen & Maria Koptjevskaja-Tamm (Eds.), *The Circum-Baltic languages: Typology and contact, Vol. 2: Grammar and typology*, 363–389. Amsterdam: John Benjamins.
Malchukov, Andrej & Anna Siewierska (eds.). 2011. *Impersonal Constructions: A cross-linguistic perspective*. John Benjamins.
Siewierska, Anna. 2011. Overlap and complementarity in reference impersonals: Man-constructions vs. third person plural-impersonals in the languages of Europe. In Malchukov, Andrej & Anna Siewierska (eds.), *Impersonal Constructions: A cross-linguistic perspective*. pp. 57-89. John Benjamins.

研究分担者としてスウェーデン語・デンマーク語の分析に携わった大阪大学人文学研究科の當野能之准教授が2023年3月21日に逝去されました。本研究課題とは別の研究課題でも共同研究を行ってきたところでもあり、早過ぎるご逝去は誠に残念でなりません。謹んでご冥福をお祈りいたします。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 當野能之、梅谷綾、南澤佑樹、芝田思郎	4. 巻 3
2. 論文標題 現代スウェーデン語基本不変化詞動詞リスト作成に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 外国語教育のフロンティア	6. 最初と最後の頁 291-300
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 入江浩司	4. 巻 11
2. 論文標題 アイスランド語とフェーロー語の不定人称文	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇	6. 最初と最後の頁 79-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00053973	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 當野能之	4. 巻 23
2. 論文標題 基体動詞の反義語となるスウェーデン語の不変化詞動詞について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 IDUN - 北欧研究 -	6. 最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 當野能之	4. 巻 11
2. 論文標題 現代スウェーデン語における疑似主語構文の分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神戸言語学論叢	6. 最初と最後の頁 87-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 櫻井映子	4. 巻 21
2. 論文標題 バルト諸語とその隣人たち 民族と言語をめぐる諸相	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 スラヴ学論集	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 櫻井映子
2. 発表標題 バルト諸語とその隣人たち 民族と言語をめぐる諸相
3. 学会等名 日本スラヴ学研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sakuma, Jun'ichi
2. 発表標題 On Passive Voice and Resultative Aspect of the Finnish Language.
3. 学会等名 13th International Congress for Finno-Ugric Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 入江浩司
2. 発表標題 アイスランド語の受動進行形について
3. 学会等名 金沢言語学フォーラム
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	入江 浩司 (Irie Koji) (40313621)	金沢大学・歴史言語文化学系・教授 (13301)	
研究分担者	菅野 能之 (Tohno Takayuki) (50587855)	大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・准教授 (14401)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	櫻井 映子 (Sakurai Eiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------